

研究者：藤原奈津美（所属：徳島大学大学院医歯薬学研究科 口腔保健支援学分野）

研究課題：歯科衛生士学生の自己教育力の実態に関する横断研究

目的：

主体的に変化に対応し、自ら将来の課題を探求し、その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力を修得できるよう、学生の主体的な学びを確立することが第2期教育振興基本計画で提言されている。我々も、歯科衛生士学生を対象に臨床実習における学習プロセスを質的に調査し、臨床実習での成果の獲得には、自らが問題点を見出すことや、それらの克服のために主体的に学ぶ姿勢や行動が必要であることを明らかにした¹⁾。主体性や自立性を発掘し、育成することが教育機関としての責務であるが、学生個々に眠る課題探求能力や自己教育力を効果的に引き出すためには、まず学生が持つこれら能力の実態を把握することが必要である。しかしながら、歯科衛生士学生における課題探求能力や自己教育力に着目した研究はこれまでに報告されていない。そこで、本研究では自己教育力に着目し、本学歯科衛生士学生の自己教育力を調査することにより各学年における自己教育力の実態を解析した。

対象および方法：

平成27年1月に、本学歯科衛生士学生1～3年生を対象として自己教育力の調査を実施した。対象人数は45人（1年生：16人、2年生：14人、3年生：15人）であった。調査時点での対象者の主な履修状況は、1年生が歯科衛生士専門科目履修前、2年生が歯科衛生士専門基礎実習履修中、そして3年生は歯科衛生士臨床実習履修中であった。自己教育力の調査は、梶田²⁾や西村³⁾が作成した40項目の調査票「自己教育測定尺度」を用いて行った。自己教育性は多岐にわたる側面があり、その中でも「成長発展への志向」「自己の対象化と統制」「学習の技能と基盤」「自信・プライド・安定性」の4側面が重要な意味を持つことが提唱されており、この調査票ではこれらの4側面を各10項目で観察することが可能である。調査票の回答様式は、「はい・いいえ」の2件法とし、「はい」には1点、「いいえ」には0点を配することで数値化を行い、その結果をもとに分析を行った。

結果および考察：

調査結果の回収率は93.3%（1年生：93.8%、2年生：100%、3年生：86.7%）で、有効回答率は100%だった。各学年の自己教育性調査の獲得点数の結果を示す（図1）。自己教育性の平均点は、1年生：24.7点、2年生25.0点、3年生：22.1点で有意差は認められなかった（Mann-Whitney検定）が3年生の獲得点数が低い傾向であった。各学年の自己教育性の獲得点数のばらつきを比較したところ、2・3年生が1年生に比べて有意性を持っていた（F検定、 $p < 0.05$, $p < 0.01$ ）。また、自己教育性の4側面と各学年での比較では、「成長発展への志向」の側面において、3年生は1・2年生に比べて獲得点数が少なかった（ $p < 0.05$, Tukey-Kramer検定）。

本研究では、上級生である3年生の獲得点数が低く、かつ学年進行につれてばらつきが大き

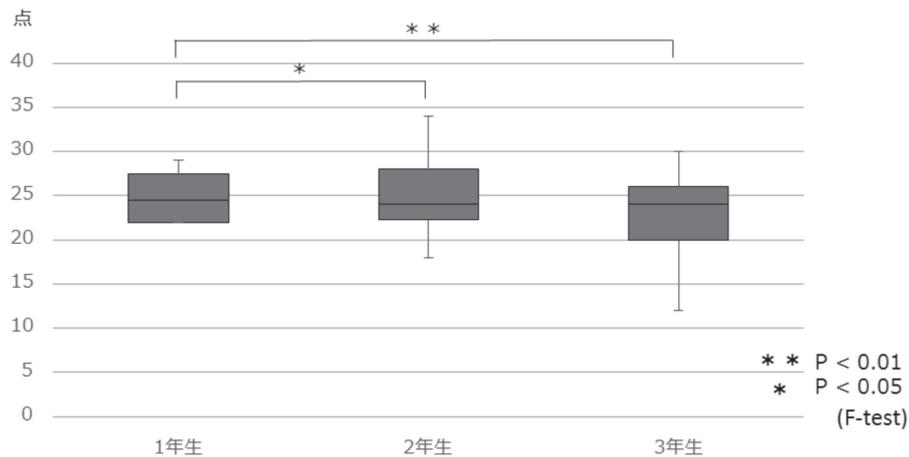


図1 各学年における自己教育力の獲得点数

なる傾向を示した。このことから、歯科衛生士専門科目履修状況が歯科衛生士学生の自己教育力に大きく影響し得ると考えた。特に、3年生は授業日程の多くを歯科衛生士臨床実習に費やしている。臨床実習は、1・2年生時の対面講義などの座学と比較して学習方法や学習手段を自己決定し、また学習内容に対する自由度が高いという側面が大きく、ゆえに個人差が出やすく、ばらつきが生じやすいと考えられる。しかしながら、看護学生を対象とした自己教育力に関する研究の多くで、学年が進行するにつれて自己教育力が高い値に変化することが報告されている。また、看護学生を対象とした研究において、実習が自己教育力を身につける学習方法であると学生の多くが認識していることが報告されている。臨床実習や基礎実習を主体的な学習とするために、学生個々が本来有している自己教育性を把握しておくことは有効であり、それに合わせた教育的指導を展開することが充実した実習に繋がることを示唆された。

自己教育性の4側面の1つである「成長発展への志向」の側面において、3年生は1・2年生に比べて獲得点数が少なかった。「成長発展への志向」は、「自分自身の行動や技能の領域やレパートリーがより広いもの、より高度なものとなるよう願う、といった構えを持つこと。現在あるがままの自分の姿から脱皮して、少しでも優れた存在へと自分自身を引き上げていく、といった志向性を持つこと。」と位置づけられている²⁾。看護学実習前後で学生の自己教育力の調査を行ったところ、実習前後で有意に低下するという報告⁴⁾があり、この中で、実習に対し高い学習意欲を持って臨んだものの、実習の場で学習不足や技術の未熟さなどから困難を感じることでより自信を喪失し、学習意欲が低下したと考察している。我々は、臨床実習における学習プロセスにおいて、臨床実習体験を通して自分自身の未熟さを感じるような『できないことが明確化』し、自己学習のような『主体的行動』に変化していくことで『学習の成果』が得られることを報告した。以上のことから、「成長発展への志向」は、突きつけられた現実をどのように受け止め、どのような行動を起こすのかのような自己決定に非常に重要な役割を担う可能性があると考えられる。教育機関の教員は（教育者は）、臨床実習が学生にとってより充実したものとなるように、「成長発展への志向」を高く維持し続けられるような教育を展開していくべきであると考えられる。

本研究結果は本学歯科衛生士学生に限定されたものであり、一般化できないことに研究上の限

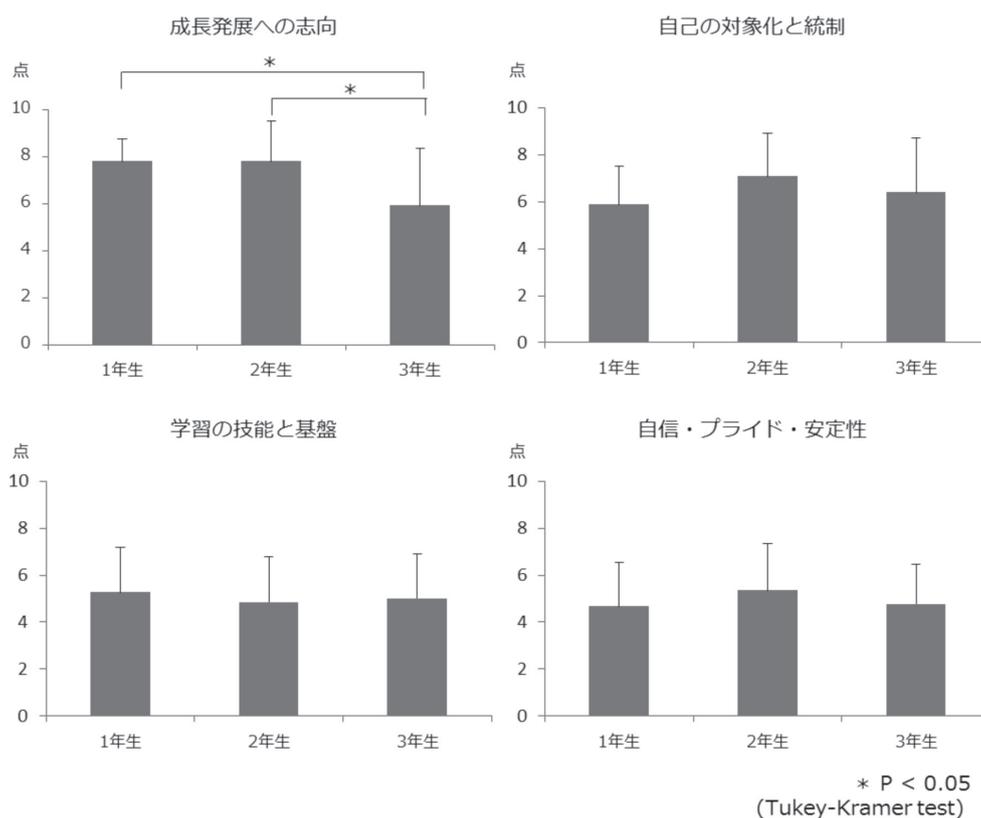


図2 各学年における自己教育性の4側面の獲得点数

界がある。単一の調査票を用いて調査したため、有意性を認めた項目に関しては縦断的に経過を追っていく必要があり、また、この調査用紙で追跡できない点については他の調査方法をもって分析するなどの必要があると考えられる。

参考文献

- 1) 藤原奈津美, 柳沢志津子, 中江弘美, 藪内さつき, 白山靖彦, 尾崎和美: 歯科衛生士養成臨床実習における学習プロセスに関する質的分析; 日衛教誌, 5 (1): 39-45, 2014.
- 2) 梶田叡一: 自己教育への教育; 明治図書, 1985.
- 3) 西村千代子, 奥野茂代, 小林洋子, 中島すまこ: 看護婦の自己教育力—自己教育力測定尺度の検討—; 日赤幹部看護師研修所紀, 11: 22-39, 1995.
- 4) 南修子, 園田麻利子, 七川正一, 上原充世, 貝山桂子: 成人看護学実習における学生の自己教育力に影響する要因の検討, 鹿純女大看栄紀要, 10: 26-37, 2006.

成果発表: (予定を含めて口頭発表, 学術雑誌など)

第34回日本歯科医学教育学会学術大会にて発表予定